

日本結核病学会北海道支部学会

—— 第62回総会演説抄録 ——

平成24年2月25日 於 札幌医科大学臨床講堂（札幌市）

（第103回日本呼吸器学会北海道支部会
と合同開催）
（第18回日本サルコイドーシス/肉芽腫性疾患学会北海道支部会

支部長 大崎 能伸（旭川医科大学病院呼吸器センター）

—— 一般演題 ——

1. 空洞病変を形成した *Mycobacterium shinjukuense* の1例 °佐藤未来・若林 修・本間紀之・荒谷義和（NHO函館病呼吸器）

症例は51歳男性。2010年検診で左肺上葉の空洞結節を指摘され当科入院。胃液・気管支鏡下吸引液の抗酸菌塗染色陽性（ガフキー8号相当）、結核菌PCR陰性、クォンティフェロン陰性で肺結核は否定的であった。肺非結核性抗酸菌症として化学療法（rifampicin+ethambutol+clarithromycin）を開始し順調に改善している。16S rRNA 遺伝子配列解析により *Mycobacterium shinjukuense* と同定された。

2. 当科で経験した HIV 感染症を合併した外国人結核の3例 °池田貴美之・夏井坂元基・汐谷 心・錦織博貴・山田裕一・宮島さつき・猪股慎一郎・工藤和実・高橋弘毅（札幌医大内科学第三講座）

厚生労働省エイズ発生動向年報によると、北海道において2001～2010年に発生した HIV 感染者は124名、AIDS 患者は75名であり、うち外国籍者はそれぞれ5名、7名であった。細胞性免疫が著しく低下する HIV 感染症では結核の感染・発病のリスクが高く、活動性結核は AIDS 診断指標疾患の1つとなっている。今回われわれは、HIV 感染症を合併した外国人結核患者3例を経験したので、その臨床像と治療上の問題点等について報告する。

3. 肺サルコイドーシスの自然経過に関する検討 °服部健史・今野 哲・西村正治（北海道大病第1内）

四十坊典晴（JR札幌病呼吸器内）大道光秀（大道内科・呼吸器科クリニック）

2000～2008年の間に、札幌市内の3病院呼吸器科において新規診断されたサルコイドーシス患者のうち、診断後2年間の経過を追えた337症例について、陰影消失の有無を後視的に検討した。50例（14.8%）で全身ステロイドの投与なしに陰影消失を認めた。発症年齢は陰影消失と有意な関連を認め、40歳以上の群では、陰影消失の割合が有意に低かった（ $p < 0.001$ ）。

4. 超音波気管支鏡ガイド下針生検（EBUS-TBNA）にて診断しえた IgG4 関連疾患の2例 °遠藤哲史¹・風林佳大¹・平井理子¹・南 幸範¹・澁川紀代子^{1,2}・佐々木高明¹・山本泰司^{1,3}・小笠寿之³・長内 忍⁴・大崎能伸¹（¹旭川医大病呼吸器センター、²旭川医大感染制御、³同内科学循環・呼吸・神経病態内科学、⁴同循環呼吸医療再生フロンティア）

IgG4 関連疾患は、高 IgG4 血症と形質細胞浸潤による組織障害を特徴とする全身性疾患である。その臨床像は多彩であり、診断には IgG4 陽性形質細胞を病理学的に証明する必要がある。今回、胸部 CT にて縦隔リンパ節腫脹を呈した後腹膜線維症（74歳男性）および自己免疫性睪炎（78歳男性）症例に対して EBUS-TBNA を施行した。免疫組織学的に IgG4 陽性形質細胞を確認し、IgG4 関連疾患と確定診断した。